

相良匡俊の思い出 (特集 相良匡俊氏寄贈シャンソン関連資料)

著者	北原 敦
雑誌名	ライブラリーレポート
号	4
ページ	33-35
発行年	2016
出版者	東京音楽大学附属図書館
ISSN	2188-4706
著者版フラグ	publisher
URL	http://id.nii.ac.jp/1300/00001249/



相良匡俊の思い出

北海道大学名誉教授

北原 敦

このたび、東京音楽大学附属図書館に相良匡俊氏が収集したシャンソン関係の書籍、楽譜、録音資料を一括して受け入れていただいた。厚く感謝申し上げたい。編集部から寄贈者の人物紹介を載せたいとの依頼があり、私より適任者がいるかと思うけれども、相良和子さんとも相談してお引き受けした。

私が相良と最初に出会ったのは1963年4月、彼が東京大学3年生で駒場から本郷の文学部西洋史学科に進学してきたときである。私は大学院に在籍していて、馬が合うというか顔を突き合わせているうちにお互い会話がはずんで、すぐに親しくなった。それ以来ちょうど半世紀に及ぶ付き合いが続いたが、彼とはいつも呼び捨てで会話をしてくて、改まって敬称をつけるのもよそよそしいので、敬称抜きにさせてもらう。

知り合って翌年、私が留学でイタリアに旅立つとき、彼は饒別に翻訳が出たばかりのジョン・ルカレ『寒い国から帰ってきたスパイ』をくれた。このことは、はっきり憶えている。私は1967年に帰国したが、このときには相良も大学院に進学しており、研究仲間として一層緊密な付き合いになった。まもなく全共闘運動で知られる東大闘争が始まり、大学院生・学部学生が一緒になって議論する中で研究会を作ろうという話になった。それが社会運動史研究会で、70年代初めから80年代半ばまで存続した。私も相良もこの研究会に加わって接触する機会が増えたが、設立当初、メンバーの大半は研究者の道を歩み始めたばかりの20歳台で、研究会では上下の分け隔てなくまったくもって自由な雰囲気での討論を交わし、『社会運動史』というタイトルの研究誌を10号まで刊行した。

相良は71年秋からパリに留学して、74年の帰国後すぐ、留学中の調査を結実させた「一八九〇年代のフランス社会主義運動」と題する長文の論文を『社会運動史』4号に発表した。学術論文といえば論理性を重んじた文章の運びになるのが普通だが、相良は論文の冒頭で「いささか風俗誌風に記述する」と宣言して、社会主義運動に携わる人々を、その思想よりも行動、振舞、

人柄といったことに関心を向けて軽妙な文体で叙述し、まるで彼らが身近な知り合いと感ぜられるような生き生きとした描写をしたのである。相良の面目躍如といえる見事な論文で、のちに研究会仲間が編集した彼の論文集『社会運動の人びとー転換期パリに生きるー』（2014年、山川出版社）に収められた。

75年4月から法政大学で教育と研究に当たることになり、はた目には面倒見がよすぎると思えるほどに学生への教育に情熱を注いだ。相良は幼時にカトリックの洗礼を受けて、ジャン＝バティスト・ドゥ・ラ・サールの洗礼名をもっていた。ラ・サールは17世紀から18世紀にかけて貧民の教育に力を尽くしたフランスの聖職者で、お父上は息子がそうした教育者になることを期待しての洗礼名だったのかどうか、はからずもそれが現実となった趣きである。相良は学生時代にカトリック学生連盟の活動にも参加していて、そこで終生の友人となる多くの人びとと出会っている。留学中はフランスの友人たちからジャン＝バティストと親しげに呼ばれて、和子夫人によればその名が気に入っていたらしい。

カトリックということに関連してひとつのエピソードがある。相良と大学同期の友人でドイツ史研究者の木村靖二が、2013年秋のお別れの会で披露した話だ。修士論文の提出期限の前日、数人が手伝いのため相良の部屋に集まっていたところ、本人は教会の祈りがあると言って出かけてしまって、お祈りが終わればすぐに帰ってくるのだろうと待っていたけれども、一向に戻ってくる気配がなく、手伝いの者たちが次第に焦り始めて、本人のいないまま何とか下書きをつなぎ合わせて清書に取り組んだというのである。当時はまだワープロなどなく、清書の手伝いは珍しいことではなかったが、本人が仮眠で休息する程度はともかく、不在となるのはまずありえないことだった。そうしたエピソードが紹介されて笑いに包まれたあと、出席者の一人が、実は私は逆の立場になるけれど相良さんに卒論を手助けしてもらったという発言があり、相良らしい親切心ということでその場は和やかな雰囲気で行われた。ところが、あとで判明するのだが、この二つはどうも同じ日の出来事だったようで、これには驚かされた。普通には考えられないことだが、それでも驚きの一瞬が過ぎると、これもまた相良の性分だと納得できる気がするのである。

相良の祖父は歌舞伎界や落語界の後援者で、当代一流の歌舞伎役者や落語家と交わりがあり、相良自身も風呂敷包みを抱えたお供として祖父に連れられ、そうした人々と会う機会に恵

まれていた。彼は少年のころから日本の伝統的な芸風に身をもって接していたのであり、そこにフランスの生活で得たエスプリの精神が加わって、センスにあふれた独特の語り口で人を引き付けた。教育の場でこの語り口が遺憾無く発揮されたに違いない。学生から慕われ、彼のゼミの受講希望者は毎年多くを数えたようで、相談事にも親身になって時間を割いていた。公私どのような場であれ、学生との触れ合いに楽しさと喜びを感じていたのである。

研究面ではその後、フランス社会の歴史的変容を知る一環として、社会主義運動のテーマに加えてシャンソンが国民的娯楽となる過程に対象を広げて、シャンソン関係の資料を集め始めた。和子夫人の話では、フランスから届く貴重な古書を嬉しそうに手にしては、シャンソンの歴史をまとめる構想を練っていたという。大学定年を迎えて、いよいよ集中的にこのテーマをまとめようとしていた矢先、病魔がすべてを奪ってしまった。彼が愛唱したシャンソンは「さくらんぼの実る頃」Le Temps des Cerises だった。そしてこの歌の作詞家であり、1871年のパリ・コミューンの蜂起に参加して、その敗北後は亡命生活を余儀なくされたジャン＝バティスト・クレマンの生涯に心惹かれていた。

以下、カトリック学生連盟以来の相良の友人である芹田希和子さんから相良和子さんへの書簡の一節を、お二人の同意を得て引用させていただく。

「癌研の病室にお見舞いに通うようになったある午後のこと・・・とても古そうな一冊にメモを書いた紙がはさんであつたので開いたら Le Temps des Cerises でした。「あ、この歌大好き。四番まで歌える！」と言いましたら、作者の Jean-Baptist Clément のこと、パリ・コミューンとのいきさつ、ベルギーへ亡命して仲間たちを想った歌と言われていることなど話してくれました。Quand nous chanterons と私がそっと歌いはじめたら、小声でいっしょにうたってくれました。昔からいい声で歌う人でした。きれいに四番まで全部うたってくれました。なんだか心にしみる時間でした。」

相良の収集した貴重な資料類が多くの人に活用されて、彼の果たせずに終わった作業を引き継ぐ人が若い世代の中から出てくることを期待してやまない。